

「求めなさい」

ルカの福音書 11:5～13

はじめに

今日の内容は前回述べた「主の祈り」の解き明かしが鍵となってきますので少しおさらいをしたいと思います。

祈り	奥義
父よ、御名が	十字架の死と復活によって父からイエシュアに与えられたすべての名にまさる名、その権威によって（ピリピ 2:9）
聖なるものとされ	神の御業、ご計画が完成、完了され（創 2:3）
御国が来ますように	地上にイスラエルの王国が建て直されるように（民 24:7）
日ごとの糧をお与えください	御国を求めさせるための苦難と忍耐を与え 「イエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている（黙 1:9）」
私たちの罪をお赦してください	私たち教会を救い
負い目のある者を赦します	イスラエルを祝福する
試みにあわせないでください	大患難時代を通らず、携拳される

このように、「主の祈り」とは、①主イエシュアの御名による神のご計画の完成である「神の国」の到来と、その国民となる②教会の救いと③イスラエルへの祝福とりなしを祈った祈りなのです。これらの奥義を覚えながらぜひこの祈りを日々主の御前に祈ることを勧めます。そしてこの奥義をふまえた上で次に続くイエシュアのたとえの内容に入ってまいりましょう。

1. 三つのパン

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:5 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうちのだれかに友だちがいて、その人のところに真夜中に行き、次のように言ったとします。『友よ、パンを三つ貸してくれないか。』

11:6 友人が旅の途中、私のところに来たのだが、出してやるものがないのだ。』

11:7 すると、その友だちは家の中からこう答えるでしょう。『面倒をかけないでほしい。もう戸を閉めてしまったし、子どもたちも私と一緒に床に入っている。起きて、何かをあげることはできない。』

11:8 あなたがたに言います。この人は、友だちだからというだけでは、起きて何かをあげることはしないでしよう。しかし、友だちのしつこさのゆえなら起き上がり、必要なものを何でもあげるでしょう。

このたとえは何でしょう。どのような神のご計画を表しているのでしょうか。この箇所におけるイエシュアの結論は、「主の祈り」を祈る私たち教会に対して「**天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます**」だから「求めなさい」という教えです。つまり父が喜んで与えてくださる、必ずそれが

与えられることが前提となっているのです。しかしこの最初のたとえでは、ある人がその友人が断っているにもかかわらず、無理強いして強引に借りようとしているものです。明らかに内容が食い違っています。ですからこの三つのパンを借りる人のたとえは、明らかに私たち教会をたとえたものではありません。すなわち、友人から三つのパンを借りようとする強引なこの人とは、イスラエルの民、ユダヤ人を指しています。そしてこの「三つのパン」とは三つのエルサレム神殿を指しています。なぜならこの三つの神殿はいずれも神の願い、命令というよりはむしろイスラエルの民の、人の側の願いによって、その熱心によって建てられた、また建てられるものだからです。ちなみに荒野に造られたモーセの幕屋は、神のご命令とその詳細な指示によって作られました。しかしエルサレム第一神殿とも呼ばれるダビデの子ソロモンが建てたそれは、ダビデの願い、志（Ⅱサム 7:2、Ⅰ歴 28:2）によって始まり、彼が御霊によってそれを設計しました（Ⅰ歴 28:11）。そしてその子ソロモンが後を引き継ぎましたが、その神殿を建てるために彼は父ダビデの盟友であったツロの王ヒラムに建材や人材の提供を要請し、彼はこれに応えました（Ⅰ列王 9:11、Ⅱ歴 2 章）。またアモリ人、ヒッタイト人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人、つまりイスラエル人ではない多くの異邦人たちを強制労働に徴用してこれを建てたのです（列王記 9:20）。これはまさにイスラエルの友としての異邦人から強引に借りてきたパンとたとえられるべきものです。

また第二神殿も同様です。ダビデの子孫ゼルバベルが建てたとされている神殿ですが、最初にこれを建てるように主が任命したのはペルシアの王キュロスです。

Ⅱ歴代誌【新改訳 2017】

36:23 「ペルシアの王キュロスは言う。『天の神、【主】は、地のすべての王国を私にお与えくださった。この方が、ユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てるよう私を任命された。』

とあるように、第二神殿もまた異邦人の強力なサポートにより建てられました。さらにこの神殿は後に大規模な増改築が施されますがそれを成し遂げたのはエドム人の王ヘロデです。ユダヤ人の歴史家ヨセフォスはこう記録しています。

「ヘロデは治世第 15 年に神殿を修復すると共に、周囲に新しい石垣を巡らして神域を 2 倍に広げた。計り知れないほどの工費を投じ、その規模の壮大なことは他に類がなかった」（ユダヤ戦記 21:1）

このように、第二神殿もまたイスラエルがその友人である異邦人の家から借りてきたパンとたとえられるべきものです。しかしこれら二つの神殿は今日、完全に破壊されて影も形もありません。これはユダヤ人にとって今でも最も大きな悲しみ、嘆きです。ですから彼らは毎年、神殿が破壊されたユダヤ暦の第五の月の十日（エレ 52:12）に集まり、断食してその再建を祈る祭りを行っています。前回の「主の祈り」の中にある「日々の糧」と訳されているヘブル語のレヘムは「パン」とも訳される言葉です。前回この「糧」レヘムとは本来、苦しみを指し示すものであると述べましたが、まさにイスラエルにとって破壊されて失われた神殿という事実は、彼らにとっての苦しみ、悲しみの源となっているのです。そして彼らは今日もなお、やがて三つ目のパンにたとえられる第三神殿を切実に求めています。この神殿は「六百六十六」の金を持っていたソロモン（Ⅰ列 10:14）、そして「バビロンの子孫」という意味の名

を持つゼルバベルが指し示す、全世界を支配する黙示録の獣、大バビロンの王、反キリストによって、その強大な力とイスラエルが契約を結ぶことによって建てられます。しかし獣はその契約期間の半分の時点で突如それを破棄し、神殿をイスラエルから奪い取り、主にいけにえをささげることをやめさせ、自らを神とし、獣をあがめさせるという忌まわしい場所へと変貌させてしまいます。こう預言されているとおりです。

ダニエル書【新改訳 2017】

9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる…。

こうしてやがて終わりの日に建てられる三つ目のパンである第三神殿もまた、イスラエルにとっての苦しみ、悲しみの場所となるのです。このように、イエシュアがたとえられた、ある人が友人から強引に借りた「三つのパン」それはイスラエルが求め、また今も求め続けているエルサレムの神殿を指し示しているのです。このように三つの神殿における苦しみとしてのパンを受けるイスラエル、ユダヤ人たちに対する神のご計画の奥義を述べた上で、次に「ですから、あなたがたに言います」と、私たち教会に対する神のご計画を述べ始められます。

2. あなたがに言います

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:9 ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。

11:10 だれでも、求める者は手に入れ、探す者は見出し、たたく者には開かれます。

「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます」この御言葉は自己実現、つまり自分の願い、願望を叶えるための格言のように一般社会でも用いられていますが、これは本来「主の祈り」に秘められていた、御国を求め、イスラエルを祝福し、これをとりなす教会に向けて語られたものです。ここにはどのような奥義が秘められているかを一つひとつ見てみましょう。

①求めなさい

シャーアル(לֹאֲשׂוּר)というヘブル語が使われています。その最初の言及を見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

24:47 私が尋ねて、『あなたは、どなたの娘さんですか』と言いますと、『ミルカがナホルに産んだ子ベトエルの娘です』と答えました。そこで私は、彼女の鼻に飾り輪をつけ、彼女の腕に腕輪をはめました。

24:48 そして私はひざまずき、主を礼拝し、私の主人アブラハムの神、主をほめたたえました。主は、私の主人の親族の娘さんを主人の息子に迎えるために、私を確かな道に導いてくださったのです。

これはアブラハムのしもべが、主人の息子イサクの花嫁となる娘を探し求めた時のものです。彼は一人の娘と出会い、「あなたは、どなたの娘さんですか」と「尋ねて」と訳されたのが聖書で最初のシャーアルです。このしもべがシャーアルした結果、娘は「ベトエル(בֵּיתְאֵל)の娘」と答えました。このベトエルとは「神の家」という意味の名前です。つまりこのしもべは「神の家」をシャーアル、尋ね求めたのです。ここに「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます (マタイ 6:33)。」と言われたイエシュアの教えが結びつきます。しかしここで神の国を「求めなさい」と訳されているヘブル語はダーラシュ(דָּרָשׁ)といい、これは次の「探しなさい」と訳されている言葉です。つまり「求めなさい」も、次の「探しなさい」もいずれも「神の家、神の国、御国」を求めることを意味し、これは先に述べた「主の祈り」の内容「御国が来ますように」という祈りと密接に結びついた教えなのです。では次のダーラシュ「探しなさい」についてもう少し詳しく見てみましょう。

②探しなさい

この「探しなさい」ダーラシュの最初の言及は、創世記 9:5 で、これは主がノアとその家族に語られたものです。

創世記【新改訳 2017】

9:5 わたしは、あなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。いかなる獣にも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。

「あなたがたのいのちのためには」つまり人が生きるために「血の価を要求する」こと、血を、いのちを求めること、つまり動物を殺してその肉を食べる者が生きるように、代価、代償としての死を求めること、それがダーラシュの本来の意味なのです。「屠られた子羊」と呼ばれるイエシュアがこの代価、代償としての役目を担い、その子羊の血(黙 7:14)を流してくださいました。それがイエシュアの十字架の死です。ここで流されたイエシュアの血によって、その死によって、私たちの罪は赦され、永遠のいのちを得ることができるようになりました。逆にこの方によって、このイエシュアの血によつてしか、人が永遠のいのちを得る方法はありません。こう書かれているとおりです。

使徒の働き【新改訳 2017】

4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。

ですから私たちがダーラシュ、探し求めるべきもの、そして必ず与えられなければ、受けなければならぬもの、それはイエシュアの死、イエシュアの血、イエシュアのいのちなのです。

③たたきなさい

そしてこの「たたく」という意味のダーファク(קָדַם)も先の意味とつながります。なぜならこの言葉は本来、戸を叩く、ドアをノックするという意味ではなく、「打ち叩いて死なせる」という意味の言葉だからです。

創世記【新改訳 2017】

33:13 ヤコブは彼に言った。「あなた様もご存じのように、子どもたちは弱く、乳を飲ませている羊や牛は私が世話をしています。一日でも、ひどく追い立てると、この群れはすべて死んでしまいます。

ここで「ひどく追い立てる」と訳されているのが聖書で最初のダーファクです。しかしこの言葉が指し示す打ち叩かれる存在はイエシュアではなく、上記にあるようにそれは「ヤコブ…の群れ」、すなわちイスラエルです。そしてこの時にパータハ(פָּתַח)「開かれる」ものは滅びをもたらす門(創 7:11)であり、その戸口、ペタハ(פֶּתַח)で待ち伏せているものは罪の力、支配(創 4:7)です。つまり、この「たたきなさい。そうすれば開かれます」という御言葉には、世の終わりの大患難においてユダヤ人を待ち受ける苦難、大きな患難の事実が指し示されているのです。今日、多くのクリスチャンがイスラエルの戦争が終結して平和になることを祈っていますが、真に私たち教会が祈らなければならないのは御言葉に示された神のご計画が成就することです。それによるならば、私たちの祈りは、大患難の中で苦しみを受けるイスラエルに対する神のご計画が成就することを覚えるものでなければならないのです。

このように、「神の国を求め、イエシュアの血による贖い、救いを求め、そしてイスラエルに対する神のご計画がなることを求めること」、それが「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます」という御言葉に秘められた「神の国の奥義」なのです。

3. 子孫と聖霊

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:11 あなたがたの中で、子どもが魚を求めているのに、魚の代わりに蛇を与えるような父親がいるでしょうか。

11:12 卵を求めているのに、サソリを与えるような父親がいるでしょうか。

ここで「魚」や「卵」を求めている「子ども」とは誰でしょうか。この「魚と卵」は本来、食べ物としてではなく、「海の魚、空の鳥(どちらも卵を産む)」を祝福された神の祝福、子ども、子孫が増えること、多くの民を指し示すものです(創 1:22)。神はアブラハムの子孫、イスラエルの民を空の星のように大いに増やすと約束されました(創 22:17)。そしてそれはまさに「蛇やサソリを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威(ルカ 10:19)」を持った御方、イエシュアによって成し遂げられます。

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:13 ですから、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っています。それならなおのこと、天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

そして私たち教会が求めるべきもの、そして与えられるもの、それは「聖霊」であるとイエシュアは教えておられます。ではこの「聖霊」とは一体何でしょう。

I コリント人への手紙【新改訳 2017】

12:3 ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。

まず「聖霊」とはイエシュアが神である主であることを信じさせ、告白させてくれる存在です。私たちは誰も自分の理解力や努力でイエシュアを信じることはできません。これはすべて「聖霊」の働きによるものです。あなたは「イエシュアは主です」と告白できますか。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。御霊は自分から語るのではなく、聞いたことをすべて語り、これから起こることをあなたがたに伝えてくださいます。

私は今、終わりの日の神のご計画について、すなわち「これから起こることをあなたがたに伝えて」います。これは私のうちにおられる「聖霊」の働きによるものです。

4. 聖霊の奥義

それではこの「聖霊」について、ヘブル語から解き明かしましょう。これを意味するルーアツハ(רוּחַ)この言葉の最初の言及を見てください。

創世記【新改訳 2017】

1:1 はじめに神が天と地を創造された。

1:2 地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上であり、神の霊がその水の面を動いていた。

1:3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。

1:4 神は光をよしと見られた。神は光と闇を分けられた。

1:5 神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

1:6 神は仰せられた。「大空よ、水の真ただ中であれ。水と水の間を分けるものとなれ。」

1:7 神は大空を造り、大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。すると、そのようになった。

1:8 神は大空を天と名づけられた。夕があり、朝があった。第二日。

「**神の霊**がその水の面を動いていた」ここに聖書で最初のルーアツハがあります。第一日目、ルーアツハは魚のように水の中にいたのではなく、まるで海鳥のように水の上を羽ばたいていたのです。つまり第二日に名づけられる「**大空**」にこれはいたのです。しかし水が「**大空の下にある水と大空の上にある水**」に「**分けられた**」時、ルーアツハの姿はなくなっています。つまり「**神の霊**」ルーアツハとは水を上と下に分けることを促す、指し示す存在だったのです。水を上と下に分ける、すなわちそれまですべて下にあった水の一部を上を、天の上に引き上げること、この御業はIテサロニケ 4:16~17 に預言された携挙の比喻「型」です。「**聖霊**」は先ほど挙げたようないくつかの働きを持っていますが、その最終的な目的の一つは、私たち教会を復活させ、地上から分離させ、「**大空**」に引き上げ、そして天へといざなう、すなわちイエシュアの空中再臨による教会の携挙を指し示し、これに導く存在だということです。

Iテサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

ちなみに、このルーアツハ(רִאֲחָה)によく似た言葉が聖書にはいくつかあります。まず見た目がよく似ているルーム(רִמָּה)は「地上から上に押し上げる、浮き上がる(創 7:17)」という意味です。また発音が似ているルーア(רִאֲחָה)は「ラツパを吹き鳴らす(民 10:7)」という意味があり、どちらも上記の預言に結びつくような言葉なのです。またルーツ(רָצַח)は「走る」という意味の言葉なのですが、それは本来、主の姿を見て、それを迎えるために御前に「走る(創 18:2)」こと、つまり「**主と会う**」ことを意味します。さらにルーアツハ(רִאֲחָה)は地上から神の御前に立ち上る「**香り(創 8:21)**」という意味の言葉です。このように、「**聖霊**」ルーアツハにつながるこれらの言葉、その文字にも、教会の携挙の事実が指し示されているのです。

ですから「**聖霊**」を求めることとは、この地上で、今の私たちの生活の中で何か超自然的な力や現象を引き出すことではありません。もちろん聖霊にはそのような力もあります。しかし、私たち教会にとってのその最終目的とは、上記の預言にあるように私たちが朽ちない身体に復活させ、そして空中に、イエシュアの御前に引き上げる、携挙することなのです。これはもちろんイエシュアの御業と一致します。父と子が一つであるように、「**聖霊**」もまたこれらと完全に一つなのです。この「**聖霊**」を「**天の父はご自分に求める者たちに…与えてくださいます**」とイエシュアは語っておられるのです。このように、私たち教会にとって「**聖霊**」イコール携挙、「**聖霊**」と携挙は同義であるというこの奥義をぜひ覚えてください。そのような意味を覚えつつこれからも聖霊求めてまいりましょう。それは必ず与えられるのですから。「**天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。**」アーメン

というわけで今回も携挙モード全開で語らせていただきました。軽拳妄動は控えなければなりません。携挙モードは全開のまま来年も進んでまいります。皆様よろしくお願いたします(笑)。